東北芸術工科大学 紀要

BULLETIN OF
TOHOKU UNIVERSITY
OF ART AND DESIGN

第29号 2022年3月

危機の時代の公共文化施設 ‘せんだいメディアテーク開館20年目の取り組み’

Public Cultural Facilities in the Era of Crises: Activities of sendai mediatheque in its 20th Year

清水 有｜SHIMIZU Tamotsu

危機の時代の公共文化施設
‘せんだいメディアテーク開館20年目の取り組み’

Public Cultural Facilities in the Era of Crises: Activities of sendai mediatheque in its 20th Year

清水 有｜SHIMIZU Tamotsu

The COVID-19 pandemic around the world since the end of 2019 has changed how the world works in a wink of an eye. On top of that, the repetition of “state of emergency” declarations has caused many public facilities to close. Consequently, many of the opportunities to carry out scheduled projects have disappeared. In the meantime, the severity of the disease has been publicized in terms of the number of infections and mortality, and these figures have forced public cultural facilities to temporarily close or shorten their opening hours. However, no fundamental solution has yet been found so far.
This “new crisis” has been a great misfortune for those of us working in the cultural field. On the other hand, it has also exposed the chaos and immaturity of the 20th-century capitalist cultural administration that has been in place up to now, and it is time for a fundamental rethinking of the way Japan’s cultural administration should be managed and supported. In this essay, the author, who works at a cultural complex in Sendai City, will discuss the essence of this crisis based on the management of the complex and the projects that were still able to be implemented during the unprecedented “new crisis” from 2019 to 2021.

Keywords:

Public cultural facilities, Sendaimediatheque, emergency management, Ambiguous Loss

1.はじめに

仙台市の公共文化施設である「せんだいメディアテーク（以下smt）」[1]では、2019年は、開館から20年目を迎える様々な周年事業が計画された節目の年だった。しかし、年をまたいで中国の武漢市に端を発し世界中に拡大した新型コロナウイルスは「世界のあり方」を一瞬にして変えた。またこの「新しい危機」の影響は、特に社会的弱者に甚大な

写真1：せんだいメディアテーク外観

被害が生じてきた。世界中でワクチン接種や治療法が懸命に模索される中で、感染のさらなる拡大や、その先の医療崩壊を防ぐには「非接触」と「隔離」が有効な方策であり、防疫面から発せられる定期的な「緊急事態宣言」は、多くの公共施設を一時的に閉館させた。また閉館とともに、予定されていた事業の実施の機会の多くが消失した。この事は私たちにとって「青天の霹靂」というにふさわしい事態であり、私たち文化・芸術に携わるものにとっての、限界を知ることにもなった。そしてその間にも、この感染症は感染者数と死者数の数字で公表されていき、公共文化施設も臨時閉館や時短開館を余儀なくされた。なお、根本的な解決策は2021年のいまもなお見つかっていない。そもそもこの「新しい危機」によって、いまでもわたしたちが苦しみから解放

されないのは、いつまでこの状態が続くか誰にもわからないということ、そして様々な疾病や自然災害の多くは局所的なことであるのに対して、このコロナ禍はグローバルかつ同時多発的に起きてきたということにある。私たちの誰もが当事者なのである。この「新しい危機」によって、これまでの文化行政のあり方の混沌や未熟さといったものがはからずも露呈したことで、世界の国々の文化行政の運営方針や支援について、根本的な見直しを迫られる時期が来ている。

本論は、開館より20年を迎えた仙台市の公共文化施設に勤務する筆者が、2019年～2021年までの「新しい危機」に際して、館の運営や実施してきた事業に焦点を当て整理しつつ論じていきたい。

2.繰り返しおとずれてきた危機

まずは、せんだいメディアテークの開館からのあゆみを振り返ってみたい。様々な節目に、繰り返し危機が訪れてきた。表1は筆者の体験をもとにsmtの節目にあった「危機」をまとめたものである。例えば「smtのコンペティション(1995年)」が開催された年にはバブル崩壊から続く「失われた10年」という日本経済の長い不況や社会的な不安、また開館(2001年)時は「9.11アメリカ同時多発テロ」、そして開館10周年の締めくくりの事業を開催する時(2001年)には「3.11東日本大震災」、そして「新型コロナウイルスの世界的な感染拡大」(2019年～)などといった状況が起こった。また、将来におとずれるであろう様々な「危機」についても、記載している。

	年度	名称
1	1993年-94年	ゼネコン汚職事件
2	1999年	2000年問題
3	2001年	アメリカ同時多発テロ事件
4	2005年	指定管理者制度の導入
5	2007年	smtの運営母体の移行
6	2008年	リーマン・ショック
7	2011年	3.11東日本大震災
8	2012年	日中の国交悪化
9	2019年	新型コロナウイルス感染症の世界的な拡大
10	2021年	建築物の改修予定
11	2025年	シニア層の人口増大に伴う社会構造の変化

表1:smtと社会的危機

さて、これまでの危機と、今回の「新しい危機」の異なる点は、今回はグローバルかつ同時多発的に世界の全てを巻き込んでのものだという点である。局所的なものではなく、常に自身が当事者となり得る、いわばすぐ隣にある危機だということである。これまでは災害や疾病、安全保障、経済危機など世界中でおきる様々な出来事は、smtの運営に影響を及ぼしてきたが、これだけのスピードを持って世界に影響を及ぼしたことはこれまでになかったといえる。では、まず10年前の「3.11東日本大震災」の時点に立ち戻り、その時中止となった「メディアテークから、未来を語る。」と題されたトークセッションについて振り返り、その後の影響なども考えてみたい。

地域創造大賞受賞記念トークセッション「メディアテークから、未来を語る。」[2]は、2011年の3月12日の開催を予定しており、その準備のために、直接の担当であった筆者をはじめ企画・活動支援室は慌ただしく準備を行っていた。トークセッションにはsmtの設計者である伊東豊雄氏、また開館前からsmtのソフト面を設計し、「メディアテーク憲章」[3]の提唱者でもある桂英史氏、そして当時は現役の仙台市長であった奥山恵美子氏をゲストにむかえ、「開館10周年」という節目の年に、当館の活動を振り返るとともに、これからの公共文化施設のあり方について市民とともに考えるという内容だった。そして、smtのハード面からとソフト面からを話題としながら、様々な公共文化施設について、smtから見えてきた10年を総括するということがねらいであった。

また、このイベントは、地域における創造的で文化的な表現活動のための環境づくりに特に功績のあった公共文化施設を顕彰する地域創造大賞（総務大臣賞）の受賞を祝っての開催ということで、ある種の祝祭的な事業の色合いも濃いものであった。しかし、3月11日の14時46分に、東日本大震災が発生し、smtも被災する。震災の被害の詳細についてはここでは省略するが、結局、このイベントが出来なかったので、公の場で市民と考え、10年を総括することは出来ず、その後の「公共文化施設のありかた」を見通すことは先送りとなってしまった。

それは、そこからの10年は「震災地域における施設としての復旧復興」が優先となったからだ。無論、その間も様々な「シンポジウム」は何度となく開かれた。例えば「あるきだすために」[4]や「てつがくカフェ」[5]など、震災後の復旧復興を、様々に考えるイベントは都度行われてきた。しかし、「公共文化施設」の来し方、行く末を俯瞰的に観察し、深く市民

写真2:あるきだすために

写真3:てつがくカフェ

と考える議論ができればと願いつつも、その後の10年の間には、「公共文化施設」によせる様々なところからの期待も、また求められる意義も格段に変わってきたといえるだろう。つまり、是非なく社会における存在感が強くなったと言える。

3.せんだいメディアテークの20年

ようやく「公共文化施設の意義」について考えるタイミングがめぐってきたのは「新型コロナウイルス感染拡大」の直前の2020年1月26日のことである。

写真4:伊東豊雄講演会 メディアテークは、なにを目指していたか

この日は、メディアテークの開館記念日であった。「伊東豊雄講演会メディアテークは、なにを目指していたか」[6]は、10年前のシンポジウムが中止となった後、様々な局面で「公共文化施設の意義」を問われることの多かった筆者にとって、このシンポジウムでの、10年待ったある種の結論への期待も大きく、参加者パネラーとも念入りな「打ち合わせ」を行ってきた。しかし、設計者の伊東豊雄氏と鷲田清一館長とこれまでのsmtの事業を開館からずっと見続けてこられたもう一人のゲストをいれての鼎談となるはずであったが、直前に出席が難しくなり、従って「鼎談」と言う形ではなく、鷲田館長と設計者伊東豊雄氏の「対談」という構造になってしまったのはとても残念なことであった。鼎談であれば、ハード面とソフト面の拮抗した客観的な考察が出来たかもしれない。とはいえ、イベントとしては大盛況で今回の話題に関心の高い市民約500人が詰めかけた。

まず、第一部の伊東氏による講演会では、1995年の「設計競技」の振り返りから始まり、当時はまだ誰にも想像がつかなかったsmtという公共文化施設を実際に「つくりながら使い、使いながらつくる」ことをやってみたと発言され、「3.11東日本大震災」後は、人が集まる場として仮設住宅の集会所である「みんなの家」を設計したことを話され、最後は、「メディアテークはみんなの家である」と締めくくった。

次の第二部では館長の鷲田清一との対談となった。伊東氏は、ずっと「壁のない建築」をつくりたいと思ってきたことや、その施設の利用者こそがその建築の意味をつくっていくこと、また、それが都市のルールや仕組みを決定する市民社会の行動の基本であると語った。「唯一無二の建築」のsmtにしても、「ただ大切に保存されているだけでは、危機に際しては無力である。だから、利用者が望むように、建築もその姿や形を変えていかなければならない」と言う言葉は、今後の「公共文化施設」のあり方を検討していく上でもとても重要な言葉であると感じた。また、「真にその建築に愛情が集まっているかどうかが、生命を持っている、その建築の生命力となり得る」という言葉は、昨今全国に多数建てられている「複合文化施設」についての重要な言説であったと思う。

それにしても、この日はオーディエンスとして参加されていた奥山元市長への「なぜこれだけの事業を行うことが出来たのか、どのような説明を市にはされたのか」という問いかけに対する「権力が移行するときにこそ空白が埋まれる」という発言には、新型コロナウイルスという「新しい危機」の後

を考えていくヒントがあった。様々な「危機」の後に起きる一連の「揺り戻し」は、これまでの予定調和な社会に一石を投げ入れ、様々なものごとの存在意義を問いかけてくる。それまでは見えなかった多くの事が見えてくるだろう。

4.曖昧な喪失　～コロナ禍で消えたもの～

前述の「伊東豊雄講演会」の終了後、ほどなくして日本国内でも、「横浜沖に停泊した豪華客船」での連日の感染報道が伝えられ、筆者の居住する宮城県仙台市でも、2月29日に初のコロナウイルス感染者が出て、3月2日からは全国的に小、中、高とも学校は臨時休校となった。仙台市内にある東北最大の繁華街からは人影は消え、市民は様々にネット上で飛び交う情報に翻弄され、食料やマスク、生活必需品などの買い占めなども起きた。その様な中で公共施設をマネジメントしていくことには、大きな課題が提起されていた。文化のインフラというべき図書館を開けておくべきか、防疫の観点からやはり臨時閉館にすべきか。そしてここから、臨時休館、開館、時短開館などの形態がめまぐるしく変わる。なお、2020年度の「せんだいメディアテーク年報」によれば、延期や中止となった事業は表2のとおりである。もちろんこの「新しい危機」にともない延期や中止となった事業は全国的に見て、枚挙にいとまが無い。国家プロジェクトの「TOKYOオリンピック2020」ですら一年延期となり、また、仙台市の定禅寺通りを中心に毎年続いてきた「青葉祭り」「七夕祭り」「JOZENJI JAZZ フェスティバル」「光のページェント」など主要な事業は全て中止となったと言って良いだろう。当館でも毎年企画、開催してきた一年に一度しかない「展覧会事業」も延期とした。延期開催や規模縮小で開催が可能になったのは、「仙台短篇映画祭」や「せんだいデザインリーグ2021卒業設計日本一決定戦」などで、イベントの内容や進め方には手を入れ、変更しながらも、ひとまず存続性というものを重視して共催団体[7]と協力しながら行えたものもある。しかし、これまでは大きな予算をあまりかけず、匿名性の高い「場」をメディアテークに作ることにより、哲学の広場を作ってきたが従来通りのやり方ではできなくなってしまった。またメディアテークがこれまで仕掛けてきた、「シネバトル」、「こどもスクエア」「オープンピアノ」、などといった館のホスピタリティを高める事業は、現時点では完全に元通りには戻っていない。

1	展覧会「ナラティブの修復」
2	展示どこコレ?―おしえてください昭和のセンダイ
3	日本語字幕制作講座
4	音声解説制作講座
5	鷲田清一とともに考えるパート2 ドートクのじかん
6	仙台・青葉まつり
7	とっておきの音楽祭
8	定禅寺ストリートジャズフェスティバル
9	せんだいメディアテーク円卓会議（20周年記念フォーラム part2 ）
10	シネバトルわたしのイチ押し映画（シネ）はコレよ!
11	シネバトルトークサロン
12	録音小屋
13	コミュニティ・アーカイブ・フォーラム（「草アーカイブ会議3」）
14	映像の仙台史

表2:2020年度に中止となった事業一覧（抜粋）せんだいメディアテーク年報より

写真5:こどもスクエア

写真6:オープンピアノ

この、「新しい危機」がもたらす変化のすごさは、毎日知らされる「数値」によって、突然人々の考え方が変わってしまう「世界のあり方」、あるいは「世界のとらえ方」であろう。新

型コロナは、普段は見えにくい事象や事態の真相にダイレクトにアプローチし、瞬時に答えを出さなければならないという苦しさを突きつけてくる。東日本大震災以来、smtは「場づくり」という事業を柱に様々な市民との関係を構築しながら事業を進めてくることが出来たが、その柱が曖昧なまま喪失するという事態は、この変化を容易には受け入れられない人たちと少なからぬ分断を生んだ。

そして、施設全体としても2つの大きな変化が見られた。1つは、これまでは公共文化施設を評価する指標としてあったのは入館者数だけであり、年間の臨時閉館が増えた為に入館者数も減少、必然的に評価も下がるという事象である。これは今も新しい評価のあり方を模索しているが、それでは、図書館機能を持つ施設であるから、図書館の書籍の「貸出件数」で評価を続けると良い、ということでもない。人が集うこと自体が大きなリスクを伴うこの状態は、図書館を併設する複合文化施設のあり方にも問題を投げかける。「貸出件数」か、「滞在者数」か。そしてこの曖昧な状態は、若者たちから、メディアテークの「空きスペース」を利用しながら家や学校以外のサードプレースとして滞在し、「自習」をするという行為を喪失させてしまった。これは　おそらく全国の地方自治体や公共施設で起きた事だろう。公共図書館には、長時間滞在することそれ自体に意義がある。例えば前述の鷲田館長の発言にも[8]あるが、普段何気なくsmtに通い使用している若者が、すぐ隣で開催されていた、今までは全く関心のなかった事業への参加者になる可能性があるということである。今までは知り得なかった様々な新たな知識や経験を得る（セレンディピティ効果）ことは、公共文化施設の魅力である。本論は2021年の第五波の収束している期間の執筆であるが、筆者としてはどうしてもこの「曖昧な喪失」で失った若者層が再び安心して来れるような仕掛けを考えたいと思っている。しかし振り返って全体を俯瞰すると、2020年、2021年に失った様々な文化的な機会こそ、公共文化施設の最大の「危機」だと後々になって、判ってくるのかもしれない。

5.「公共建築はみんなの家である」展[9]

3月からは全国的な緊急事態宣言が続きsmtも閉館が続く。スタッフの中には県をこえて出勤をしているスタッフも有り、smtも一時は、「在宅勤務」が導入され、オフィスの「人」を減らす試みがなされた。

その様な閉塞した状況の中で「空きスペース」を有効に活用した展示が「公共建築はみんなの家である」展である。これは、伊東事務所が手がけた図書館や劇場など4つの公共建築、「せんだいメディアテーク」、「まつもと市民芸術館」、「座・高円寺」、「みんなの森ぎふメディアコスモス」の、キーパーソンや利用者、スタッフなどの声を取材し、詳細でわかりやすい相関図にまとめたものである。写真7、8の通

写真7:公共建築はみんなの家である展示風景

写真8:公共建築はみんなの家である展示風景

り、これは利用者アンケートを分析し、それぞれ4つの施設をサポーターたちの声の構成が新しい展覧会である。例えばメディアテークのユーザーの声には「（メディアテークは）生活の一部、空気のような存在」や「ほっとできるみんなの家」という見出し、高円寺のパネルには「劇場のカフェは自由に使えて、俺ん家みたいなんだよ!」など、利用者の声が建物の写真や設計図とともに、所狭しとレイアウトされた。これらの相関図にある声を眺め、観覧者一人一人に意見を持ってもらい、これからの公共建築の意義やあるべき姿を考えていこうというのがこの企画である。伊東氏は自身の近著『美しい建築に人は集まる』[10]（平凡社）の中で「もっと優しくなれ。優しい視線で建築を考えよう。それは、弱い立場でものを考えるということではなく、むしろもっと自分が強く

ありたいという気持ち。」と語っている。更に未曾有の震災の後に自身の建築に対する思いの変化も綴ってあり、文末の50年に及ぶ「建築の設計」を通しての「建築とはやはり五感に訴えかける美しい空間を作ることであり、その建築には自ずと人は集まる。」という言葉は本展とも重なり、大病を超えた当時の伊東氏の心のうちを感じることができた。元々、この展示は東京の「LIXILギャラリー」で展示されるものであったが、コロナ禍により「LIXILギャラリー」自体が閉廊することになってしまい、準備を続けていた伊東事務所が、それを残念に思い意志を継いで全国巡回を続けた企画であった。smtでも無理をせずに仮設的に設置した移動パネル4枚という小さな展示として開催したが、この様な時期だからこそ、人々が集う場所を作る公共建築について本当に多く人々が関心を寄せる展示となった。

6.20年目の言葉を編む

やがて、前述の展示が終了した頃、「緊急事態宣言」は解除になり、2020年の秋からは様々な経済政策がはじまるが、2021年の2月には、またさらに感染者が（第4波）増大し、行政からの指示に従い、臨時閉館や時短開館を繰り返すことになった。もしも「コロナ禍」でなければ、この時点では20周年の事業として「円卓会議」[11]や「20周年記念書籍の発行」が計画されていたが、どちらもかなり前に延期や中止としていた。変わってその「円卓会議」での資料とすべく、せめてこれまでsmtで開催されてきた事業を総括し、全事業記録として編年的に編集するという事業「せんだいメディアテーククロノロジー 2001―2021」は行うことになり、下半期はこの「アーカイブ事業」に人手や予算を重点的にかけて行うことになった。本展は、smtのこれまでのあゆみを、編年的に事業ごとに整理し、写真、映像、書類などの資料を集め、「クロノロジー(年表)」に編纂した。苦心したのは、限られた時間の中でこれまで20年間の事業全てを残らず集め確認しながら編纂することであった。これは、いわば「20年間の事業の戸籍づくり」であり、様々な担当者が行ってきた大小様々な事業に再び命を吹き込むことであり、smtの様なクンストハレ型[12]の収蔵品を持たない公共施設としては事業台帳の「アーカイブ事業」の基礎作りは存在価値の根本をなす地道ではあるが大変な仕事である。20年目の言葉を編む作業は、これまでお題目の様に「アーカイブ」といわれ続け来たことであったが、今回の「新しい危機」により、ようやくその作業のための調査や、人手、予算、知恵などといったものが集い、また全ての新規事業がはからずも停止していたからこそようやく実現できたことだったといえる。「公共文化施設」はこれまで予算や評価は、個別の事業毎であり、アーカイブしていくことは、市やメディアにはあまり注目されることがなかった。今回も最終的には「展示」という事業の形態を取った。

写真9:せんだいメディアテーク クロノロジー 2001―2021

地味なアーカイブ調査は評価が難しいと思われているだろうが、それらの作業が今回で全て解決したわけでは無く、時間が流れている以上、現在進行形で取り組まなければならないと言える。

写真10:せんだいメディアテーク クロノロジー 2001― 2021
展示風景

7.おわりに

本論は2019年度の講演会「メディアテークは、なにを目指していたか」や、2020年度の「公共施設はみんなの家である展」、「せんだいメディアテーククロノロジー2001-2021」など、コロナ禍で様々な事業が喪失していった時期に、筆者が関わってきた事業を並べ振り返りながら考察を論じて

きた。東日本大震災後の10年間。それは復旧、復興を最優先に考え、いわば「市民と共にあゆんでいく」ことに必死であり、社会の状況に順応させていく事に精一杯の時間だったように思う。施設自体も震災で傷ついた箇所を修理することに過ぎた10年だったのかもしれない。しかし自然災害とは異なった「新しい危機」はヒトとヒトが接触する事がリスクとなるパンデミックであり、改めて施設の社会における存在理由のコンセンサスをとるべき絶好のタイミングだったように感じた。様々な施設は、その存在を必要とされるために何が必要なのかを、常に考えながら運営をしなければならない。その当り前のことがなかなかできていないという事が、公共文化施設の危機[13]とも感じる。

最後に。2020年4月上旬、水の透明度が増したベニスの運河では、水面にクラゲが泳いでいることが確認され話題となった。また、中旬にはインド北部では深刻な大気汚染の為これまで見えなかったヒマラヤ山脈が数十年ぶりに見晴らせるようになり、さらに世界を驚かせた。経済活動を優先し自然破壊を繰り返してきた人類が、地球規模のパンデミックから身を守る為に行った都市封鎖や経済活動の停止が、ひいては自然や生命の美しさ、素晴らしさを再発見させることになったのだ。当初、この事例は「ベニスのクラゲ」「ヒマラヤの青山」[14]として数多くのニュースや映像で世界中を駆け抜けた。行き過ぎたグローバル資本主義と環境問題を天秤に掛けていくような出来事であり、今回の感染拡大はヒトへの天譴（てんけん）[15]として、または、壊れかけていた自然を元に戻すための安全弁として働いているのでは?という寓話的な教訓である。地球環境の危機が予測不可能な「新しい危機」を呼び寄せ、社会は人口減少と超高齢化の圧力が高まっていく中で、今後ますます公共文化施設の存在感は増していくだろう。芸術や文化はいつも半歩遅れて、社会のありようを映し出す鏡であると思う。これは日本の地方自治体のみならず世界中の公共施設にとっての一大転換期となる状況であるともいえる。自治体は今ある資産を運用し、仕分けをし、誇りを持って、維持していくべき施設にはきちんと使い、来るべき次なる危機に備えることが大事なのではないだろうか。そして最終的には、2030年の30周年の時点[16]にもsmtが、公の施設として愛されているかを点検し、次の10年に向かうことが出来ればと感じている。そしてその時点にはこの感染症の収束が見られ、また同時に次世代の新市民による、より民主的でより新しい使われ方がなされていることを願う。（了）

註釈

1. せんだいメディアテーク
2001年に仙台市にオープンした公共文化施設。「メディアテーク」は、フランス語で棚や入れものなどを意味するテーク(theque)とメディア(media)の合成語でさまざまなメディアを利用して、市民の知的な活動を支援するという意味を表している。建物は地上7階、地下2階、総面積21,682㎡。市の中央図書館的機能を持つ図書館をはじめ、作品を収集しないクンストハレ型のギャラリー、16、35ミリフィルムを含む様々な上映メディアに対応するスタジオシアター、屋内型公開空地の機能を持つオープンスクエア等を有し、各種の展覧会、上映会、ワークショップ等の開催が可能、あわせて「smtコレクション」等のアーカイブ資料も充実してきている。

2. メディアテークから、未来を語る。
日時:2011年3月12日（土）13:30-16:00
会場:せんだいメディアテーク1階オープンスクエア

3. 「メディアテーク憲章」
発案者の桂英史氏の名をとって通称・桂3憲法とも呼ばれている。1.「最先端の知と文化を提供（サービス）」、2.「端末（ターミナル）ではなく節点（ノード）へ」3.「あらゆる障壁（バリア）からの自由」であり、この3つの方針を常に拠り所にして館のスタッフは運営を続けてきている。

4. あるきだすために
2011年5月3日～8日までの6日間にわたり、せんだいメディアテークと仙台市民図書館の震災後の再開にあわせ、1階オープンスクエアにて、鷲田清一氏(哲学者)、伊東豊雄氏(建築家)、小野田泰明氏(東北大学教授)、加藤種男氏(財団法人アサヒビール芸術文化財団事務局長)、タノタイガ氏(美術家)、とよたかずひこ氏(絵本作家)を招いてトークをおこなった。

5. てつがくカフェ
「てつがくカフェ」は、いつも当たり前だと思っている事について「そもそもそれって何なのか」と問い直し、参加者同士で「対話」を重ねることで、考えることの難しさや楽しさを体験する企画で、2010年から続くメディアテークの事業の一つである。特に、2011年の東日本大震災以後は、震災に関わる問いや課題をテーマにした「てつがくカフェ」を定期的に開催してきたが現在はオンライン方式なども試行している。

6.「伊東豊雄講演会メディアテークは、なにを目指していたか」
日時:2020年1月26日（日）14:00-16:00
会場:せんだいメディアテーク　1階オープンスクエア
2021年1月に開館20年を迎えるせんだいメディアテークのプレイベントとして、smtの設計者である伊東豊雄氏による開館当初のねらいや、当時思い描いた未来像を講演いただき、オープン記念の展示や開館10周年事業など、作家として当館と関わりの深い港千尋氏（不参加）と、鷲田清一館長とともに、メディアテークで日々繰り広げられる諸活動から得られる雑感を交えながら、2020年以降の仙台および東北地方における当館の役割、その新たな未来像について考察した。

7. 共催団体
『京都芸術センター2020年度事業報告書』
粘り強く、強かに、自由を担保しながら、創作の現場であり続けることができるのは、芸術の力を信じ、多くの人とその思いを共有して

いるからこそである。
38P 「また始めるために」山本麻友美著
8. 発言
「smtコレクション」参照
「smtコレクション」伊東豊雄講演会「メディアテークは、なにを目指していたか」
https://www.youtube.com/watch?v=cC4u9wV5LUM
01:57:45 の部分での発言
9.「公共建築はみんなの家である」展
～伊東豊雄の四つの公共建築～
会期 2020年8月20日(木)－10月21日(水)
日時 9:00－20:00
会場 せんだいメディアテーク 7階
10. 近著『美しい建築に人は集まる』
p 3、6行目
11. 円卓会議
このイベントはsmtの関係者(特に若い関係者を希望していた)に話し合いの場を作り、登壇していただきながら、長時間滞在してもらい、これからの「公共文化施設のあり方」を語ってもらうというものであったが中止となった。
12. クンストハレ型
コレクションをもたずに企画展を開催する美術館の形態。(例:国立新美術館、水戸芸術館など)
13. 公共文化施設の危機
なぜ地方都市に「TSUTAYA図書館」が次々とつくられているのか?
https://gendai.ismedia.jp/articles/-/51414?imp=0
地方を捨て、仲間を見返すため勉強する場所
自分の過ごした地方を捨て、親を超え、仲間を見返すため勉強すること。図書館は、それを鷹揚にも許してくれる。
貞包英之著
14.「ベネチアの運河にクラゲ、都市封鎖で澄み切った水面近くを泳ぐ」
https://www.cnn.co.jp/fringe/35152848.html
『せんだいデザインリーグSDL:Re-2020 OFFICIAL BOOK』(2020/9/5発行)建築資料社編
P110-111「ヴェネツィアのクラゲとヒマラヤの青山」拙稿
15. 天譴、天罰のこと。天災は、天が腐敗した人間社会を懲らしめるためにもたらす罰とする見方。
16. 2030年の当館の30周年
『統廃合だけでは対応できない!ポストコロナ社会の公共施設マネジメント』
「公の施設」(「住民の福祉を増進させる目的を持ってその利用に供することになる施設」地方自治法第244条)
16p 10行目 南学編著

参考文献

『せんだいメディアテーク建設事業のあゆみーコンペから開館までー』せんだいメディアテーク編
『増補新版せんだいメディアテークコンセプトブック』(2005/3発行)NTT出版編
『いま、バリアとはなにか』(2011/1発行)せんだいメディアテーク編
『検証 平成建築史』(2019/3/28発行)日経アーキテクチュア、日経BP社編 内藤廣著
『AXIS 6月号 vol.205 特集 デザインミュージアムの正解』(2020/5/1発行)アクシス
『のこす言葉 KOKORO BOOKLET 伊東豊雄 美しい建築に人は集まる』(2020/6/26)平凡社伊東豊雄著
『伊東豊雄自選作品集: 身体で建築を考える』(2020/8/7発行)平凡社伊東豊雄著
『せんだいメディアテーク年報(2020年度)』(2021/9発行)せんだいメディアテーク編
『せんだいデザインリーグSDL:Re-2020 OFFICIAL BOOK』(2020/9/5発行)建築資料社編
『せんだいデザインリーグ2021 卒業設計日本一決定戦 OFFICIAL BOOK』(2021/9/1発行)建築資料社編
『せんだいメディアテーククロノロジー 2001― 2021』パンフレット(2021/3/31)発行
せんだいメディアテーク編
『ミルフイユ04 』(2012.0331)赤々舎・せんだいメディアテーク
『ミルフイユ07』想起の法則(2015.0320)赤々舎・せんだいメディアテーク
『世界がもし100人の村だったら お金編』(2017.0130発行)マガジンハウス発行
『伊東豊雄美しい建築に人は集まる』(2020/6/26発行) 平凡社
『建築の難問』(2021/7/16発行)株みすず書房 内藤廣著
『美術館と大学と市民がつくるソーシャルデザインプロジェクト』(2018/10/23発行)
東京都美術館×東京藝術大学 とびらプロジェクト編
『京都芸術センター2020年度事業報告書』(発行:2021.0531)
『統廃合だけでは対応できない!ポストコロナ社会の公共施設マネジメント』
学陽書房発行 (2021/2/13) 南学編著

参考映像

1.「smtコレクション」伊東豊雄講演会「メディアテークは、なにを目指していたか」
https://www.youtube.com/watch?v=cC4u9wV5LUM